

## 使徒行伝4章「聖霊による大胆な証し」

### 1A 反対者の脅かし 1-22

1B イエスの復活への苛立ち 1-4

2B 救われるべき御名 5-12

3B 神への従順 13-22

### 2A 仲間たちの勇気 23-37

1B さらに宣教のための祈り 23-31

2B 財産の分与 32-37

## 本文

使徒の働き4章を開いてください。イエス様が、十字架に付けられる直前に、弟子たちに最後まで愛された言葉がありました。ヨハネ 13 章以降にある言葉です。イエス様は、もうひとりの助け主を遣わしてくださることを約束されて、それだけでなく世があなたがたを憎むことを警告されていました。しかも、その迫害者は、神を敬わない世の人ではなく、神に仕えていると思っている宗教指導者であることも語っておられました。「ヨハ 15:24b-25・けれども今や、彼らはそのわざを見て、そのうえでわたしとわたしの父を憎みました。これは、『彼らはゆえもなくわたしを憎んだ』と、彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。」聖霊に満たされて、主の証しを行っていく中で、必ずや反対や迫害が起こることを教えておられたのです。そして、その反対の中でも聖霊が助けて下さり、力強く彼らが証ししていくことも約束されています。続けて主はこう言われます。「15:26-27 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいます。あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。」

そして、4 章からそれが現実のものとなります。宗教指導者が彼らの福音宣教に反対し、彼らを捕らえます。ところが、それがかえってペテロとヨハネを大胆にさせ、さらにイエス様を証しするきっかけとなるのです。聖霊の働きと福音宣教というのは、このように向かい風が吹いている時が実は前進しているとも言えます。例えると、風に向かってヨットというのは前に進むことができます。ジグザグに進むのですが、前に行くのです。まさに、その姿をこの章で眺めることができます。

### 1A 反対者の脅かし 1-22

1B イエスの復活への苛立ち 1-4

<sup>1</sup> ペテロとヨハネが民に話していると、祭司たち、宮の守衛長、サドカイ人たちが二人のところに来て来た。

ルカは、彼らの働きに反対した三種類の人々を挙げています。一つは「祭司たち」です。ルカの福音書の初めに、バプテスマのヨハネの父、ザカリヤがいたことを思い出してください。彼は当番で香壇に仕えました。24 の組に分かれていたのですが、かなり多くの祭司たちがいました。そして、「宮の守衛長」です。神殿の治安を守るような、神殿警察の長と呼んでもよいでしょう。大祭司に次ぐ権威が与えられていたそうです。そしてサドカイ派の人たちです。といっても、祭司も宮の守衛長もユダヤ教のサドカイ派に属していましたが、それ以外のサドカイ派の人たちのことです。

サドカイ派は、祭司や貴族階級の人たちだけが属していました。一般の人たちには、パリサイ派の教師が教えていました。サドカイ派は神殿礼拝が守られることが最大の使命であり、多神教を信ずるローマの支配の中で政治的妥協の中で生きていました。考え方は、合理主義で、物質主義です。目に見えるものしか信じませんでした。聖書もモーセ五書だけが神のことばであり、霊も天使も信じていません。復活も信じていません。イエス様に、七人の夫と死に別れて結婚した妻が復活したらどうするのかと問い質したサドカイ人がいましたね。

このように、主の働きには、いろいろな方面から反対があります。祭司たちは、云わば、宗教的に非寛容な人々を象徴しているでしょう。「日本人たるもの、神道と仏教でなければだめだ！」として、キリスト者に対して圧力をかけるみたいなものです。次に、宮の守衛長は、政治的に敵対する人々の象徴でしょう。中国であれば、教会に対してそれが共産党の政府を脅かすとして、集会をやめさせたりします。そしてサドカイ人は、「目に見えないものは信じない」とする不信仰の表れです。死んだら終わりだ、永遠のいのちなど要らん！というような態度です。

<sup>2</sup> 彼らは、二人が民を教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立ち、<sup>3</sup> 二人に手をかけて捕らえた。そして、翌日まで留置することにした。すでに夕方だったからである。

彼らの苛立ちは、「民を教えている」ということです。自分たちが権威者だと思っていますから、脅威に感じたのです。そして何よりも、「イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていること」に苛立っているのです。死者の復活を信じていないので、それを自分たちの管理している神殿の中でおおっぴろげに語られていることに苛立ちました。

そして、午前礼拝でお話ししましたが、法廷を召集するのは日没後はしてはいけないことに、彼らの定めた規定の中にありますから、留置していました。本来は、これが正しい姿なのですが、イエス様の時は、夜に捕らえて、一方的に死刑に定めたのですから、いかに不法な手続きだったのかを物語っています。

<sup>4</sup> しかし、話を聞いた人々のうち大勢が信じ、男の数が五千人ほどになった。

ものすごい人数ですね！初めのペテロの説教で三千人の男がバプテスマを受けましたが、ここで、生まれながらの男を立ち上がらせた後にペテロとヨハネが語って信じた者たちが、五千人ほどになっています。パウロの言ったことばを思い出します、「I コリ 16:9 実りの多い働きをもたらす門が私たちのために広く開かれています、反対者も大勢いるからです。」

## 2B 救われるべき御名 5-12

<sup>5</sup> 翌日、民の指導者たち、長老たち、律法学者たちは、エルサレムに集まった。<sup>6</sup> 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロと、大祭司の一族もみな出席した。

イエス様が前もって弟子たちに告げておられたように、彼らが裁きの座に福音のゆえに連れられていられることが現実のものとなっています。「ルカ 12:11-12 人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき」と言われました。次の5章では、他の使徒たちも裁かれていますし、6章と7章ではステパノが裁かれ、殉教します。22章では、パウロが裁かれています。午前礼拝では、ルターがカトリック教会によって裁かれた話をしました。今も世界各地で、信仰のゆえに裁かれている人たちが大勢います。

この集まりは、サンヘドリンという71人の構成員のよって成り立っているユダヤ人の最高法院です。(毎回、71人が参加する必要はないですが。)ここでもルカは、サンヘドリンを構成する三種類の人々を挙げていますが、「民の指導者たち」は祭司長たち、「長老たち」というのはパリサイ派の重鎮・そして、「律法学者たち」は口伝律法を含めた律法の解釈をする人たちです。そして、何よりも、「大祭司の一族」が参加していることがすごいです。イエス様を裁判にかけたアンナス、そして死刑宣告を出したカヤパがいます。ヨハネの福音書の学びで、カヤパがローマによって任命された大祭司で、その義父アンナスは以前、大祭司の職についていたけれども、カヤパが大祭司になってからもその力を維持していたことを学びました。宮は、アンナス家が牛耳っていたと言っても過言ではありません。宮清めをイエス様が行われた時、直接の影響を受けたのはこれらアンナス家の者たちです。まさに、イエス様に対抗して、イエス様を殺すことを仕向けた権力者たちが、勢ぞろいなわけです。

<sup>7</sup> 彼らは二人を真ん中に立たせて、「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問した。<sup>8</sup> そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。<sup>9</sup> 私たちが今日取り調べを受けているのが、一人の病人に対する良いわざと、その人が何によって癒やされたのかということのためなら、<sup>10</sup> 皆さんも、またイスラエルのすべての民も、知っていただきたい。この人が治ってあなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです。<sup>11</sup>『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。<sup>12</sup> この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほ

かに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

ここの部分を午前礼拝でじっくりとお話しました、ぜひ聞いてください。彼らは、申命記にある律法、すなわちしるしを行った預言者が別の神々に仕えるようにそそのかしたら、殺さないといけな  
いとする律法を意識して、ペテロがそれに違反するように誘導尋問しているのですが、ペテロは聖  
霊に満たされました。ペテロの心の中では、これまでイエス様によって訓練を受け、清められて  
いた部分があります。それは、「自分の望むところではなく、むしろ望まないところに連れていかれる」  
あるいは、「自分の肉は十字架に付けられている」ということです。ペテロがやっていることではあ  
りません、ペテロがむしろ、何もやっていないところに、聖霊の満たしがあるのです。

そして、ここまで徹底的に、真理をそのまま伝えている言葉がないと言ってもいいほどです。大  
胆というのは、こういうことです。権威や圧力から自由にされて、真実に、良心をもって神に仕える  
ことのできる自由です。

### 3B 神への従順 13-22

<sup>13</sup> 彼らはペテロとヨハネの大胆さを見、また二人が無学な普通の人であるのを知って驚いた。また、  
二人がイエスとともにいたのだということも分かってきた。

これは彼らの見方であって、正確ではありません。彼らにとって、確かにガリラヤの漁師であった  
ペテロとヨハネは無学です。ラビとしての正式な教育を受けていません。しかし、主イエスご自身  
から三年半の間、また復活された後は特に、じっくりと聖書全体からキリストについて解き明かし  
ていただきました。主と共にいて、主から多くのことを学んだのです。これは、キリスト教会につい  
ても多くのことを教えているのではないのでしょうか？

神学校に行ったり、学問や学歴によってその人の聖書知識を推し量れるものではありません。  
カルバリーチャペルの牧師たちの多くが、正規の神学校に行ったことのない者たちです。けれども、  
何らかの形で聖書をじっくりと学んでいます。つまり、どれだけ、主に教えていただいたのか？とい  
うことに基づきます。また、聖霊の働きによります。「I コリ 2:13-14 それについて語るのに、私た  
ちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御  
霊のことばによって御霊のことを説明するのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属するこ  
とを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊  
に属することは御霊によって判断するものだからです。」聖霊の導きによって書かれた聖書は、同  
じく聖霊によって理解するものなのです。

そして「二人がイエスとともにいた」と分かったとありますが、イエスと共にいたのではなく、その  
時も共にいるのです！トマスのことを思い出してください、イエス様のよみがえりを彼は疑いました

が、イエス様が八日目に現れて、トマスの会話をすべて知っておられ、そこに目に見えずともおられたことを教えています。イエス様は弟子たちに、「マタ 28:20 見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」と言われました。パウロが宣教旅行の中で、反対を受けてとても辛い思いをしている時、例えばパウロがエルサレムに戻って、ユダヤ人が怒りだし、混乱状態になり、自分自身もローマ兵によって拘束されなかったら死んでいたかもしれなかった時、こう書いてあります。「23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことばを証したように、ローマでも証ししなければならない。』と言われた。」とあります。主を目で見ずとも、そこにおられるのです。

<sup>14</sup> そして、癒やされた人が二人と一緒に立っているのを見ては、返すことばもなかった。

ここが、彼らの証しの力強さです。返すことばもないほどの立証を、この癒やされた人を通して行っているからです。これが、キリスト教信仰の証しです。反証や反論ができないのです。ただ黙るしかないのです。目の前に、その証拠があるのですから。変えられた人生、そこによみがえられたイエスがおられることを知ることができます。

<sup>15</sup> 彼らは二人に議場の外に出るように命じ、協議して言った。<sup>16</sup>「あの者たちをどうしようか。あの者たちによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムのすべての住民に知れ渡っていて、われわれはそれを否定しようもない。<sup>17</sup>しかし、これ以上民の間に広まらないように、今後だれにもこの名によって語ってはならない、と彼らを脅しておこう。」

否定しようのない事実に、彼らはどうすればよいか分かりませんでした。「エルサレムのすべての住民に知れ渡っていて」とあるように、証拠隠滅もすることができません。それで、ただ脅迫するという手段を取りました。「今後だれにもこの名によって語ってはならない」と言って、彼らは注意深く、イエスという名を避けています。自分たちが、イエスの名を信じるという霊的な波に飲まれないよう、細心の注意を払っています。しかし、彼らの知らなかったことは、脅迫したら、ますます彼らがイエスの名をかたり告げることです。

<sup>18</sup> そこで、彼らは二人を呼んで、イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならないと命じた。<sup>19</sup>しかし、ペテロとヨハネは彼らに答えた。「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。<sup>20</sup> 私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」

ペテロとヨハネは二つのことを話しています。一つは、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか」であります。このことは明確に神から出たものです。それは、サンヘドリンの議員たちも認めざるを得ないことでした。そうであれば、神の命令に反することを命



じる人の命令に聞き従ったら、神の前では正しいと認められなくなってしまいます。

聖書の中には、信仰者の二つの姿勢が出てきます。二つと言っても、本当は一つですが、「権威に従う」というものです。神に従うのはもちろんですが、人の権威に対しても、それが神からのものであることを知って、従うのです。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」ある人から聞いた話ですが、中国で役人が徴税をしている時に、徴税と言っても米を収めさせるようなので、かなり昔の話だと思います。農民たちが運んできたもののなかで、クリスチャンが運んできたものは、中身を調べもせずにそのまま受け取ったそうです。なぜか？他の多くの人、小さな砂利を入れたり、ごまかしているけれども、クリスチャンはごまかさないのでそうです。クリスチャンは、権威ある人は、神から立てられていると信じているので、それに従うことに特徴があります。神が、権威を与えられなかったら、その人には力がないからです。

けれども、その立てられている人が、もし神の命令に違反するようなことを命じたとしたら、相手への敬いを保ちつつ、神に聞き従うほうを選ぶのです。出エジプト記では、助産婦たちに、ヘブル人の男の子は殺せとファラオが命じましたが、神を恐れて出産させました。そうやってますます、ヘブル人が増えていきました。ダニエル書では、金の像に拝めというネブカドネツアルの命令に、ダニエルの友人三人は聞き従いませんでした。今でも、そのような選択が迫られる状況はあります。日本にはないですが、集会を開いてはいけないとする当局の命令に違反して、それでも地下に潜って礼拝する兄弟姉妹が、世界中には数多くあります。

そして、彼らのもう一つの姿勢は、「自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」というものです。彼らはイエス様の復活の目撃者です。なぜ復活があったのかを私たちが知ることができるのか？それは、これら使徒たちが、どんな拷問を受けても、どんな非業な死を迎えても、イエスが復活したという証言を曲げなかったからです。12人が申し合わせて、「イエスがよみがえったことにしておこう」として、宣べ伝えていたら、誰かが必ず吐きます。拷問による自白は、世界中で行われています。それは効果があるからです。人は苦しみを受けて入る時に、どんなに口が堅くとも本当のことを口走ってしまいます。けれども、彼らは一貫して否定しなかった。ここに、最も大きな、イエスの復活の事実があります。

<sup>21</sup> そこで彼らは、二人をさらに脅したうえで釈放した。それは、皆の者がこの出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、二人を罰する術がなかったからである。<sup>22</sup> このしるしによって癒やされた人は、四十歳を過ぎていた。

あまりにも、この出来事が人々に明らかになっていたので、彼らを罰することができませんでした。イエス様も、エルサレムで、宮で教えておられた時に、捕らえられることがなかったのは、民がこの

方を預言者だと認めていたからです。使徒たちに、主がおられることを証しています。そして、この癒された男が、四十歳過ぎであったというのは、生まれてから 40 年以上そうであった人が立ち上がったということ、まざまざと教えています。

## **2A 仲間たちの勇気 23-37**

### **1B さらに宣教のための祈り 23-31**

<sup>23</sup> さて、釈放された二人は仲間のところに行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。

ペテロとヨハネは、自分に起こったことを残らず報告できる「仲間」がいました。使徒の働きでは、使徒たちが個人で動いていることも時々ありますが、大半が仲間で動いているのを見ます。彼らは主の共同体を形成しているのです。そしてペテロとヨハネは教会の指導的な働きをしています。けれども、その二人が仲間に報告するという義務感を持っていたのです。指導者であるから、誰に対しても責任がないというのは大間違いで、指導者もまた、教会という体に対して説明責任があるのです。そして、それは彼らにとっても安心することであり、安全なのです。自分を縛るのではなく、むしろ霊的に守られるのです。私たちにはそれぞれ、安心、安全だと思う共同体となっているでしょうか？自分は自分で動いている、それが主のみこころだと思っていたら、聖書にある信仰者の姿とは大きく異なっていることに気づかないといけません。

<sup>24</sup> これを聞いた人々は心をつにして、神に向かって声をあげた。「主よ。あなたは天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた方です。」

彼らが行ったのは祈りです。使徒の働き 2 章 42 節で、彼らが行っていたことに、使徒の教えを堅く守り、パンを裂き、交わり、そして祈りをしていたとありました。祈ること、しかも仲間で心をつにして祈ることの大切さがここに表れています。自分たちが押し潰されそうになるような状況の時に、高嶺にまで引き上げてくださる方が私たちの主です。「詩 61:2 私の心が衰え果てる時私は地の果てからあなたを呼び求めます。どうか及びがたいほど高い岩の上に私を導いてください。」

彼らの祈りに特徴的なのは、はっきりと声を上げたことです。はっきりと語りました。心からの祈り、告白するような祈り、真実を語る祈りが必要です。その初めが、誰に対して語っているか？ということです。「あなたは天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた方です。」ということです。これは、詩篇 146 篇 6 節にある言葉です。この世に生きていますと、神が造り主であられて、すべてを支配する王であられることを見失わせてしまうもので満ちています。それで、自分の目の前にある問題を、すべてを支配する神に投影させてしまいます。私たちの住んでいる地球より、はるかに大きい太陽も、自分の目の前に十円玉を当てると見えなくなるように、神の栄光が見えなくなるのです。それで、祈る時に誰に祈っているのかをはっきりさせることは大事なことです。

<sup>25</sup> あなたは聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ、異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの国民はむなしいことを企むのか。<sup>26</sup> 地の王たちは立ち構え、君主たちは相ともに集まるのか、主と、主に油注がれた者に対して。』<sup>27</sup> 事実、ヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人たちやイスラエルの民とともに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、

これは、詩篇 2 篇からの引用です。究極的には、終わりの日、ハルマゲドンの戦いで国々が、神とメシアに対して王たちが相ともに集まって戦うことを示しています。けれども、彼らは今、自分たちの置かれている状況に当てはめて祈っていきます。ユダヤ人の王と呼ばれるヘロデ、そしてローマの総督ピラトに当てはめます。イエス様のことに敵対する動きの中で仲良くなっています。「ルカ 23:12 この日、ヘロデとピラトは親しくなった。それまでは互いに敵対していたのである。」

ここで大事なのは、「あなたは聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して」と言っていることです。予め、主がダビデによって聖霊によって語らせておられたということ。つまり、主は予めこれらのことを知っておられたということです。いろいろな状況が押し迫ってくる中で、主の知らないことはないということです。主は、私たちのことのすべてを予め知っておられます。今、私たちが何が起きているのか分からないとして混乱していても、主は知っておられるのだということを知るのは大切です。

ですから、祈る時、事情を知らない主に情報を伝えるような祈りは意味がないと言えるでしょう。そうではなく、自分たちの必要をはっきりと言葉にして出すということです。イエス様は、エリコに近づいた時に、盲人の物乞いが「私をあわれんでください。」と叫んだので、「ルカ 18:41 わたしに何をしてほしいのですか。」と尋ねられると、「主よ、目が見えるようにしてください。」と伝えました。もう、主はそのことはご存じだったのです。けれども、必要をはっきりと認めるのです。

<sup>28</sup> あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。

彼らの祈りは、神が予め知っておられただけでなく、定めておられた、ご計画されていたことを告げています。今、起きていることには神が次に行われようとしていることの準備と言ってもよいでしょう。すべては神の御手の中で起こっていて、ご自分の目的のために動かしておられるのです。私たちは、何か辛いことがあるとなかなかそのように思うことができません。けれども、キリストがご自分の民から拒まれて、宗教指導者から捨てられることは、耐え難いことですね。けれども、その不条理さえが、神の御手とご計画によって起こったことなのです。

<sup>29</sup> 主よ。今、彼らの脅かしをご覧になって、しもべたちにあなたのみことばを大胆に語らせてください。<sup>30</sup> また、御手を伸ばし、あなたの聖なるしもべイエスの名によって、癒やしとしるしと不思議を



行わせてください。」

ここでようやく、彼らは願いを言っています。哀願しています。私たちはとにかく、願いから神に申し上げますが、呼びかけて、神がどのような方なのかを知り、また御言葉によって神のご計画を知り、その上で祈ります。

ここでの願いが、実に御心になかったものとなっています。脅かしがなくなりませんようにとは祈らなかったのです。イエス様でさえが、神の予知と予定によって、苦しみを受けられました。むしろ、イエス様は父の御心をその苦しみの中で選び取ったのです。同じように、彼らの祈りはイエス様が命じられたこと、イエス様の証しを立て、福音を宣べ伝えることを行えるようにという祈りを献げました。使徒パウロも、同じような祈りの要請をエペソの人たちにしていますね。「エペ 6:19-20 また、私のためにも、私が口を開くときに語るべきことばが与えられて、福音の奥義を大胆に知らせることができるように、祈ってください。私はこの福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています。宣べ伝える際、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」

彼らは、みことばを大胆に語らせてくださいと祈り、それから癒しやしるしや不思議を行わせてくださいと祈っていますが、それは、イエス様の聖なる御名があがめられるためであり、みことばが確かなものとなるためです。主から命じられたことを行うための聖霊の力です。

<sup>31</sup> 彼らが祈り終わると、集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り出した。

これはすごいです、五旬節の時の聖霊降臨と似たような現象が起こっています。このようにして祈りによって、聖霊の力強い働きが継続するのです。2章では、激しい風が吹いてきたような気響きがあり、炎のような舌が分かれて現れましたが、ここでは場所が揺れ動いています。これは、ユダヤ人にとっては、シナイ山のことを思い起こさせるものですね。火の中に主が現れ、地震もあり、地は震えました。その中で主のことば、十の戒めが与えられましたが、彼らは今ここで、神のみことばを大胆に語り出しています。私たちが、主のことばを語るのに聖霊の満たしがどれだけ必要なかが分かりますね。

## 2B 財産の分与 32-37

<sup>32</sup> さて、信じた大勢の人々は心と意思を一つにして、だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた。

教会がますます盛んになってきた様子をルカは描いています。2章にて、聖霊が初めて降った後のことが書かれています。「2:44-45 信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、

財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。」足なえの男が起き上がって、5千人が信じたので、さらに多くの人々が、この共同体に加わりました。

初めの教会の共産体制について、その手段は果たして正しかったのか意見が分かれます。5章、次の章ではアナニアとサツピラの偽善の問題もあり、6章では、やもめの配分で不公平が出てきました。後に飢饉が起こって、ユダヤに住んでいる兄弟たちが困窮したことが10章29節にあります。彼らはおそらく、神の国が間もなく到来する幻が強烈にあって、神の国にある愛と平和の姿、それを聖霊に満たされて実践しようとしたのではないかと思われます。紀元後90年代に、ヨハネが活着しているうちに主が戻ってこられるという噂があったことがヨハネの福音書にあり、主が来られるのだから、財産を売り払って共同生活をするということも動機にあったかもしれません。けれども、主が間もなく来られることを信じながら、使徒パウロは、「召されたところに留まっていなさい」とコリント第一7章で教えているし、テサロニケ第二3章でも、自分の手で働くことを勧めています。主がまだ来られないうちは、人にまだ罪があるので、理想のようにはうまく行かないのです。

しかし、聖霊の導きによって、これだけの愛が彼らの中に生まれたということは、奇跡的であり、こちらが大事です。「信じた大勢の人々は心と意思を一つにして」ということです。イエス様が、「ヨハ13:34 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と命じられたことを実践していたのです。自分自身のことばかりを求めている中で、聖霊の満たしによって、愛がこれだけ溢れるのです。

<sup>33</sup> 使徒たちは、主イエスの復活を大きな力をもって証しし、大きな恵みが彼ら全員の上にあった。

足なえの男が起き上がったように、主イエスの復活が大きな力をもって証しされていきました。その中で、「大きな恵みが彼ら全員の上にあった」とあります。単なる恵みではなく、大きな恵みです。主の力が現れるところには、私たちが受ける資格のない、神の好意があります。神が、私たちにも関わらず、良くして下さるすばらしさがあります。

<sup>34</sup> 彼らの中には、一人も乏しい者がいなかった。地所や家を所有している者はみな、それを売り、その代金を持って来て、<sup>35</sup> 使徒たちの足もとに置いた。その金が、必要に応じてそれぞれに分け与えられたのであった。

旧約聖書の時代から、貧しさという問題が浮き彫りにされています。律法において、神は何度となく、貧しい者を顧みよという命令を出しておられます。その現実が、共同体の中ではなくなっていたということです。そして、使徒たちが管理しています。私たちはこれから、教会がどのようにキリストの身丈に成長するのか、使徒の働きで見ていくこととなりますが、使徒たちが祈りと御言葉に専念するために、給仕する者を七人任命するようになっていきます。賜物にしたがって、それぞれ

が奉仕に整えられていく態勢が進展しているのです。私たちも同じです。初めは指導者が全てのことを管理していても、聖霊の導きによって、働きが賜物にしたがって分け与えられていくように変えられます。

<sup>36</sup> キプロス生まれのレビ人で、使徒たちにバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、

<sup>37</sup> 所有していた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

ルカは、後に数多く出てくる、バルナバの紹介を始めます。使徒の働きの中でとても重要な務めにつきます。ここで彼を登場させたのは、5章に出てくるアナニアとサツピラと対比するためです。所有のものを一部自分のものにしていたのに、すべてだと偽った彼らに対して、バルナバは、真実に代金をすべて使徒たちの足もとに置きました。

彼は、「キプロス生まれのレビ人」とのことです。キプロスは、地中海に浮かぶ島ですが、パウロとバルナバがアンティオキアの教会から遣わされて行く初めてのところが、キプロスです。バルナバは、離散しているユダヤ人の家系から出ています。けれども、エルサレムにも親戚がいます。その第一回の宣教旅行で、バルナバはマルコを連れて行きます。マルコは、コリント4章10節によると、バルナバのいとこです。そのマルコは、母がマリアと言い、エルサレムに家を持っていることが分かります(使徒10:12)。ですから、離散の地の出身ですが、エルサレムに在住しているユダヤ人ということでしょう。

そして、彼はレビ人ですね。彼はレビ族であるにも関わらず、畑を所有しています。律法の中に、レビ人は相続地を持ってはならないという命令があります(民数18:23-24)。キプロスに所有している畑があったのでしようが、バビロン捕囚から帰還したユダヤ人たちには、レビ族に対する所有禁止の命令が大して重んじられていなかったようです。

そして、バルナバは、ヨセフという名前であり、バルナバはあくまでも別称でした。使徒たちに、そう呼ばれていたのです。「慰めの子」ということですが、ここで見る彼の、惜しみなく与える愛の行いに、それが現れています。ただそれ以上に、彼がこれから行っていくことは、人々をつなげて、分かれているところを一つにし、平和を造っていく働きをしていくからです。最も大きなことは、異邦人のための使徒として召されたパウロを、教会の中に紹介していくことです。9章で、パウロは、キリストの弟子たちを激しく迫害する人でしたから、回心しても、信じないで恐れていました。けれどもバルナバが、パウロに起こったことを説明して、彼を兄弟として受け入れることができるようにしました。11章では、アンティオキアに主を信じる者たちが起こされていること、異邦人にも救いが起こっていることを聞いて喜んで、エルサレムの兄弟たちはバルナバを遣わします。そしてバルナバは、その時には故郷タルソに戻っていたパウロを連れ出して、アンティオキアで働きに従事できるように助けたのです。そして、第一回宣教旅行で、バルナバとパウロが遣わされます。

その彼も、聖霊に満たされた人であることが 11 章 24 節に書いてあります。「彼は立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大勢の人たちが主に導かれた。」このようにして、それぞれの人が聖霊に満たされて、大胆に主のことばを語り、人々が信じていきました。私たちも、聖霊の満たしによって、心が一つにされて、また大胆にイエス様を証していく者たちでありたいです。